

知らない人でも機関リポジトリを

萩尾 美香

<はじめに>

私は現在、別府大学附属図書館の職員として3年勤務させていただいております。主にILLと機関リポジトリの業務を担当しております。こちらに異動した当初、私は本格的に大学図書館の仕事を経験したことがありませんでしたので、担当になったものの全ての業務が初めての経験でした。今回は、私の機関リポジトリ業務で経験してきたことを紹介させていただきます。

<機関リポジトリとの出会い>

異動が決まって引き継ぎで別府大学附属図書館にお邪魔した時に、前館長から色々と図書館の現状についてお話を聞かせていただきました。



「機関リポジトリという言葉聞いたことがあるか」と尋ねられ、私が首を横に振ると、「別府大学には機関リポジトリっていうのがあるんだけどね・・・」と機関リポジトリというものについて話がすすみ、「・・・ということであんたが担当ね、大丈夫大丈夫ちゃんと僕が教えてあげるから」と、言われたことが機関リポジトリとの最初の出会であり、付き合いの始まりでした。初めて聞いた言葉だけれどなんだか担当が私になってしまい不安でしたが、前館長の「大丈夫大丈夫！」という言葉はいつも魔法ではないかと思うくらい安心してしまう力があるので、そんなに大変な事だとは感じず、「宜しくお願いします」と答えたような気がします。今、同じ返答がすぐにできるかどうかは怪しいところですが。

<機関リポジトリってなんだろう>

未だに、機関リポジトリってなんですか？と聞かれると、難しくて即答できません。初めてその言葉を聞いた人にとってなんと説明すれば納得がいくのだろうと戸惑ってしまうのです。あくまでも私個人の解釈ですが、簡単にいえば、「機関リポジトリとは、研究機関が各自の紀要など学術的な論文や保存に値する資料をインターネット上に保存している倉庫のようなものであり、インターネットを利用できる環境にあれば24時間世界中どこからでも無料でその論文などの資料を閲覧できるサービス」といったところでしょうか。私が司書課程で学んでいた頃にはおそらく聞かなかった言葉ですし、インターネットを利用して機関リポジトリという言葉キーワードにして検索してみても難しい説明が並んでいる事が多いので、リポジトリの紹介の際には大変説明に苦労します。

<機関リポジトリのいいところ>

機関リポジトリのシステムを導入するためには、結構な苦難が待ち受けています。導入資金や継続資金の有無、技術者の有無等が主に問題として挙げられると思います。システム自体は慶應義塾大学を中心として行われている機関リポジトリ構築のための研修会などに参加すると、その研修会で作ったものをいただけるので持ち帰ればすぐにでも導入できるという、そんな嬉しい研修会もあるのですが、その他の問題で導入が遅れている大学も少なくはないようです。

どうしてこんなに大変なものを導入するんだろうと最初は私も疑問に思っていました、学んでいくうちに、このような苦難を乗り越えてでも導入する意味は沢山あるのだとわかりました。それは、研究者にとっては自分の研究成果を世界中の人々に知ってもらえる機会ができること、利用者にとっては高い雑誌の購読料を支払わずに研究分野を研究しやすくなること、特に大学生には論文の書き方や参考文献の引用の方法等、大変参考になるものが容易に手に入ること、大学にとっては社会に説明責任を果たせること、そして図書館にとっては雑誌の購読料の件はもちろんのことですが、文献複写サービスの手間が大いに省け他の業務に時間を割けること、一度登録すれば半永久的に残ること、災害があっても資料が喪失してしまっても、データが残っていればまた復元できること等です。まだまだ他にも利点はありそうですが、資料保存の倉庫としての利用だけが目的ではないことを知った時、機関リポジトリの素晴らしさを少し理解できたような気がしました。

<地域学協会への広報活動>

別府に限らず、大分県には沢山の史談会様など、地域の歴史を研究される学協会が存在します。

別府大学附属図書館は、別府史談会様、大分県地方史研究会様、佐伯史談会様の機関誌を別府大学地域連携プログラムBUNGOという機関リポジトリに掲載させていただいています。これも前館長が各会や機関の長と交渉を進めてくださったこと、先方がご快諾くださったことから実現したことです。本学が国東市と交流協定を結んでいることから、三浦梅園の「三語」のうち、当時どこも公開していなかった「贅語」の公開許諾を国東市教育委員会文化財課に願い出たところ、遺稿所有者への著作権処理後、先方よりCD-Rの貸出協力の申し出をいただき公開に至ったこともありました。

ご協力いただいた史談会様のところへ出張して、現状報告も兼ねて機関リポジトリとはどういったものか、これから別府大学機関リポジトリはどうしていくのかなど、会員様の前で発表したこともありました。インターネットをあまり利用しない世代の方が多い中、機関リポジトリとはどういうものであるか説明することはとても緊張しましたが、予想に反してすんなりと理解していただけて、質問までいただいたりと好評に無事終わることができほっといたしました。



<国立情報学研究所の支援事業>

国立情報学研究所(CSI)が行っておられる機関リポジトリ支援事業で、本学も助成金を20～24年までいただいているところですが、ちょうど私が異動してきた年は領域2（先端的な研究・開発）に加え、領域1（機関リポジトリ構築・運用）の申請がとおった年でした。

8月から事業がスタートして、まずは手元にある本学で生産された論文の著作権処理、登録対象の文献を集める作業から始めましたが、調べなくてはならないことや許諾をいただくための書類のやりとりなど、しなくてはならない事務作業は山積みでした。文献があれば即登録公開できると思ったら大間違いでした。著作権者の住所の調査、海外を含めた出版者の許諾を得るための文書のやり取り、改めて著作権というものの取り扱いの難しさを思い知らされました。

<強力助っ人アシスト君>

いよいよ文献の著作権処理も少しずつ進み、文献を登録できる状態になっても、メタデータという文献の書誌的なデータを1件1件入力する作業は大変でした。直接機関リポジトリに1件1件登録していくと、紀要など同じ1冊の資料に記載されている事項で全ての論文に共通する記載事項（例えば雑誌名、出版者、ISSN等）毎回記入しなければならないし、記入ミスがあれば修正もまた個々にやりなおしをしなければならないという大変気の遠くなる作業でした。1冊の紀要を機関リポジトリに登録するためには、通常業務と並行して行くと半日は時間を要しました。

それが、前館長のお手製登録システム、「アシスト君ブッ」の登場により劇的に改善されました。紀要1冊の登録に半日かかっていたものが、たった1時間程度の作業で済むようになったのです。その後も改良に改良が重ねられ、パソコン操作があまり得意ではない人でも簡単に登録ができるものとなり、登録件数も劇的に向上しました。登録には学生アルバイトを雇っての作業でしたが、みんな私よりも覚えも早くすぐに使いこなしていました。授業の合間を見つけては登録作業を進めてくれて、ちゃんと丁寧に効率よく作業をひたすら真面目に頑張ってくれました。本当に感謝をしています、事業の継続があればずっとお願いしたいところです。

<CSI 委託事業成果発表会>

毎年6月に行われるCSI委託事業成果発表会では、他大学の成果発表を2日にわたって聴かせていただきました。本学の出番はポスターセッションの時で、1年間の成果を表現したポスター2枚の前に立ち、質問者が現れた場合に説明をするといったものでした。その時は、前館長と職員の技術と知恵と苦勞が詰まった力作のポスターのおかげであつという間に持ち時間は終了いたしました。

2年目の委託事業成果発表会も前年と同じ流れだろうと自分の中で段取りをしていたのですが、成果報告書を提出した後のある日、国立情報学研究所の機関リポジトリ担当者の

方からメールがきました。まずい、なにか提出物に不備があったのだろうかと緊張が高まりました、メールの内容を見て急ぎ前館長に連絡をいたしました。そのメールには今回は委託事業成果報告の代表校の1校として取組みの発表をと打診があったからです。どうやら機関リポジトリに動画を登録したことが面白い取組みだと評価されたようでした。お断りするはずはないと思ってはいましたが、「あんたが発表たい」と、受話器から聞こえた予想外のお言葉に、「無理ですあんな大舞台」と即答の私でした。出張の先々で講演と宣伝をしてくださっていた前館長が今回も発表してくださるはずだと思っていたのですが、退職を控えていらして開催される委託事業報告会の日程には参加できないこと、担当者は私1人であったことから発表できる該当者が自ずと私しかいませんでした。「大丈夫大丈夫ちゃんと僕が教えてあげるから」と、聞き覚えのある魔法の言葉がまた聞こえました。更に「女は度胸よ！」とも。



発表の日が迫るにつれて不安もつのも、何度も館長室に通い質問攻めの日々、東京に発つても発表直前まで携帯でやり取りして確認し、いざ本番！およそ200人の参加者にぐっりと取り囲まれたホールの壇上、こんなに寿命が縮まる思いがしたのはおそらく生れて初めての経験でした。詳細については恥ずかしいのでご勘弁願います。

<おわりに>

委託事業3年目、今年も前館長にご助言を頻繁にいただきながら、進めている状況です。肩書だけは横文字でリポジトリ担当と偉そうに名乗り学生にも指導してはいますが、3年経った今もまだまだ未熟者で学ばなければいけないことが山積みです。

機関リポジトリという言葉さえ知らなかった私でもある程度システムを扱えるようになった、人様の前で宣伝する機会もできた、機関リポジトリ担当者でなければ絶対に関わることのなかった人々とも交流を持つこともできたという喜び、自分の無力さに嫌気がさすと不向きな私がなぜ担当なんだろうと悩むこともあり悲喜交々の3年間でしたが、今思うと機関リポジトリとの日々は苦労よりも達成感や喜びのほうが勝っています。

無知な私に新しい図書館の世界を見せてくださって、1から丁寧にご指導くださった前館長、困った時も忙しくても優しく助けてくださった職場の皆様、こつこつと頑張ってくれた学生のみんな、未熟者でも優しく受け入れてくださった機関リポジトリ関係者の皆様のおかげで担当者はずされずここまでこれたのだと心から感謝をしています。私が出来たことは微々たるものですが、これからはもっと自分の知識や技術の向上に時間を使い、そして本学教員、更には地域、出版者のリポジトリへの理解を得るための広報活動も積極的に行わなければと、改めて身の引き締まる思いです。どうかこれからもこの未熟者にご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

(はぎお・みか 別府大学附属図書館)